

岸上伸啓著『イヌイット——「極北の狩猟民」のいま』

(東京, 中央公論新社 [中公新書 1822], 2005年11月, 210頁, 740円+税)

岡庭義行

本書は、カナダ・イヌイットの調査研究を二十年あまりにわたって続けてきた岸上伸啓氏による光彩陸離たる民族誌である。ただし、巻末で著者自身が述べているように、本書は「研究の志向が基礎的なものから応用的なものへと移行しつつある過渡期」にまとめられたものであるために、数多くの問題提起が行間に満ち溢れている。その意味で、本書はイヌイットに関するモノグラフの役割を果たしつつも、決してその枠内に収まるものではない。

本書の冒頭で、著者は1960年代に本多勝一氏が著した『カナダ・エスキモー』に言及し、「本多氏がいきいきと描き出したような、冬季に雪の家に住む生活は今では見られない」と述べる。そして「それから四十年近くたったイヌイットの生活はどのようなものであろうか」という問いに答えることが本書の目的であることを表明している。

また、本書の記述に際して、特に留意した点として、イヌイットと外部社会、イヌイット社会内部の多層性、そして「負の側面」の記述という3点を挙げている。そのどれもが、必ずしも人類学者がフィールドで正視してきたものではないことを、自戒を込めて認めざるを得ない。確かに、イヌイット社会に限らず、人類学が記述の対象とする社会は、決して外部社会から隔離されたものではない。このことは、1980年代に笠原政治氏が台湾山地社会の事例において指摘した「外部の歴史 (external history)」との接続の問題を想起させつつも、二十年以上経った現在でも、未だにこの問題と格闘を続ける人類学の宿命を痛感せざるを得ない (笠原 1988)。また、フィールドにおいてキー・インフォーマントからインタビューを繰り返す手法については、これまで人類学者の間で内省的な言説がなかった訳ではない。ただし、対象社会の多層性はわかっているにもかかわらず、その隘路を突破するためには長期的かつ継続的なフィールドワークしかなく、短期的な解決を図れないことを、我々が直視してこなかったことも確かであろう。さらに「イヌイット社会に愛着を寄せるがゆえに、負の側面も記述する」という著者の姿勢には脱帽せざるを得ず、著者と対象社会に究極のラポールが形成されていることを、あらためて実感させられるのである。

本書は、第I章「自然環境と歴史」、第II章「極北に生きる」、第III章「都市イヌイット」、第IV章「深刻な環境問題」の4章から構成されている。第I章「自然環境と歴史」では「エスキモーかイヌイットか」という、いわば古くて新しい課題である集団呼称の問題整理からはじまり、イヌイット社会の歴史的な変遷を詳しく記述している。そして、本書で対象とされるケベック州アクリヴィック村を概観することで本章を結んでいる。この章で、冒頭の著者の留意点に接続される箇所は、やはりカナダ国家という外部社会とイヌイット社会との関係についての記述である。資源問題に端を発して、先住民の権原 (native title) が法的に確認された1973年の判決は、イヌイット社会にもカナダ政府にも大きな影響を与えたことは確かだが、それ以上に注目すべきは、著者が「不思議な関係」と呼ぶ、カナダ政府と彼らとの社会的な関係である。著者は、先住民の生殺与奪の権利が主流社会側 (国家) にあるというスチュアート・ヘンリ氏による刺激的な議論を引用しながら、カナダ・イヌイットが「国家とうまく付き合い、また、利用しながら、政治的な自律性を獲得して来た先住民族のひとつである」と結論づけている。そして「多くのイヌイットが、カナダ国民であることを誇りに思っていることも事実である」と続けている。

第Ⅱ章「極北に生きる」は、本書のおよそ半分の頁を占めているカナダ・イヌイットの民族誌である。この章では、おそらく著者が「応用的なもの」と呼ぶ領域に移行する以前の問題意識に基づいた調査研究の成果を窺い知ることができる。むしろ、このような「基礎的なもの」が著者の知的関心領域を拡大させていく出発点となったと換言することもできるだろう。ここでは、まさにイヌイット社会の現在が描かれており、一貫して対象社会を閉じた社会として捉えることを回避している。時代的要請や問題意識の違いが存在していることも確かであろうが、本書で貫かれている姿勢は、本多勝一氏が「できるだけ近代文明の波から離れたところを選ぶように心がけ」（本多 1981）たこととは、明らかに異質なものである。このことは、『「極北の狩猟民」のいま』という本書の副題からも推察することができる。

著者によれば、イヌイット自身も「自分たちは狩猟民である」という表現を好んで用いることがあるという。しかしながら、著者は同時に「2005年の時点のイヌイット社会を狩猟採集民として表現するには無理がある」とも述べている。なぜなら「狩猟と漁撈だけで生活を営んでいるイヌイットは存在せず、何らかの形で現金を手に入れ、生活を営んでいるのが現実」だからだという。その上で、あらためて年間を通したイヌイットの経済行為を詳細に記述した著者の民族誌は、確かに「これまでの民族誌」とは異なっている。特に、彼らに特徴的な、獲物や食物の分配に関する記述では、著者はその社会変化を慨嘆することなく、「ハンター・サポート・プログラム」や「アザラシ毛皮プロジェクト」を利用した彼らの経済戦略を「したたかにかつ積極的に」という表現を用いて記述している。

なお、現金収入に関する記述で注目される点のひとつがイヌイット・アートに関するものであるが、その中でも、最も興味深いエピソードは、イヌイットの版画と日本の錦絵との関係に関する記述である。著者は「日本の伝統的なやり方とイヌイットのアイデアが結びつけられて、イヌイットの版画が誕生し、発展したのである」と冷静に解説するが、日本文化とイヌイット文化との交錯が、時間と距離を超えて成されていたことには、素直に感嘆させられる。

第Ⅲ章「都市イヌイット」では、ケベック州モントリオールを対象として、都市イヌイットの現状、都市への人口移動の背景、アイデンティティの多様化、社会問題などが記述されている。その中には「生まれ故郷に住む家族や親族、友人との関係を維持している」一方で、飲酒、麻薬、売春などの深刻な問題が発生していることも指摘されている。また、そのカウンターメジャーとして 2000 年に発足した「モントリオール・イヌイット協会」の活動についても解説されているが、同時に著者が述べる都市イヌイットの展望からは、その限界をも感じさせてしまう結果となっている。

第Ⅳ章「深刻な環境問題」は、すでにイヌイット社会で発生している問題が私たちに無関係ではないことを実感させられるものである。確かに、異常気象や有害物質がもたらす生命の危機は、イヌイット社会を崩壊させる可能性を秘めている。実際、「イヌイットの母乳から、南部の都市に住む女性の三倍から五倍の高濃度な PCB が検出された」という本書の記述を読めば、多くの人類学者が、できるものなら、これまでの自身の研究を役立てて、彼らの社会に還元し、自然環境資源の管理や社会開発などに役立てて欲しいと考えるのではないだろうか。それほどまでに極北の環境問題が深刻化していることを、本章では痛切に理解させられるものである。

海洋資源利用やそれをめぐる紛争など、近年の岸上氏の問題系を考えると、本書における都市化や環境問題に関する記述は、著者の問題意識の変遷がそのまま本書に表出したものとして解釈される（例えば、タウンゼント 2004 など）。この意味で、本書は著者の連続した著作

の一部を構成するとともに、著者の述べる「これまでの民族誌」から「これからの民族誌」への橋渡しを見事に果たしている。ところで、それではこのような社会問題（負の側面）を解決するためには、どのような方策が有効なのであろうか。本書において、著者は決して問題提起だけに終わらず、その解決の手がかりを示唆している。そのひとつが教育の問題である。現在の彼らに必要なとされている教育とは「自らの歴史や文化の重要性や、先住民社会と国家との関係を理解でき、かつ現代の市場経済に適応できるような知識や技術、そして言葉を身につけることを可能とするような教育」であると著者は述べる。恐らく、著者が環境問題で言及している女性リーダーの活躍の背景にも、教育の成果があるのではないだろうか。もちろん、このような教育が達成されることの困難さは、高岸深谷であるイヌイト社会を熟知している著者自身が身にしみて理解しているものと察する。しかしながら、困難であっても、この難題を突破するために必要なもののひとつが、著者が述べるような教育施策なのであろうことも確かに共鳴できるのである。

本書において、著者はあえて文化人類学に対するこだわりを表している。すなわち「このような、同時代の周辺社会や周辺人を研究する学問はほかにはないだろう」と文化人類学が他の文化諸科学に対して持つアドバンテージを主唱している。それでは、我々が、その研究成果を調査地の人々に「還元し、役立てたい」と考えたとき、このような文化人類学の自律性を保ちながら、果たして具体的に何を期待できるのであろうか。その解答は決して短期的に示されることはないし、またそれは決して一様ではないことだけは理解できる。ただし、その鍵となる記述が、本書の「私のイヌイト観」と題して披瀝された著者のイヌイト観にあると考えられる。そこでは、客人をもてなす達人で温かい心を持つ人々などが、体験的に語られている。これらはすべて著者の経験と主観であるがゆえに、むしろ著者と調査地との良好な関係を推測できる記述ばかりである。そして、この記述が我々に予感させることは、世界中でフィールドワークをしている人類学者が、自らが対象とする人々と「サウニック」のような関係になることの延長線上に、恐らく、前述の問いかけに対する解答が示されるのではないかとことであった。その意味で、本書はイヌイト研究を志す人類学者に読者を限るべきではなく、人類学において「応用的なもの」を志す研究者たちに必読の書であると言えるだろう。

参考文献

笠原政治

- 1988 「台湾山地社会史の風景—ルカイ族首長家の系譜伝承をめぐる—」 須藤健一・山下晋司・吉岡政徳共編著『歴史のなかの社会』弘文堂

本多勝一

- 1981 『カナダ=エスキモー』朝日新聞社

スチュアート・ヘンリ

- 1998 「先住民が成立する条件—理念から現実への軌跡—」 清水昭俊編著『周辺民族の現在』世界思想社

パトリシア・タウンゼント

- 2004 『環境人類学を学ぶ人のために』（岸上伸啓・佐藤吉文共訳）世界思想社

(おかにわ・よしゆき／帯広大谷短期大学)